

カツラマルカイガラムシの山林における大発生

○大澤正嗣

山梨県森林総合研究所

カツラマルカイガラムシ [*Comstockaspis macroporana* (Takagi)]はブナ科を中心とした広葉樹に寄生するカイガラムシで、1960年代および1970年代に、西日本のクリ園で大発生し問題となった。その後、大きな被害は報告されていなかったが、1999年から山梨県のクリ園および広葉樹林で本害虫の拡大がはじまり、2005年には爆発的に増加し、大きな被害を出した。多犯性で多種の広葉樹に寄生が認められたが、特にナラ類、シデ類、カエデ類、カンバ類で被害が激しく、半枯れ～枯死となった木も多数見られた。寄生しないと考えられていたバラ科（フジザクラ）にも寄生が認められ、モモ、スモモ等果樹への被害も懸念された。山梨県より遅れて、長野県、富山県、新潟県、福島県、宮城県、山形県、岩手県、栃木県でも被害が発生し拡大した。どこもクリ園および広葉樹林の被害で、特に長野県、山形県では大きな被害となった。

本カイガラムシの1齢幼虫は有脚で歩行する。しかし歩行距離は1m前後であり、木から木への移動は歩行以外の方法と思われた。被害木の周囲に粘着版を付けた杭を立てたところ多数の1齢幼虫が粘着版に捕捉され、1齢幼虫は風により移動、分散している可能性が示された。また、植栽直後の苗木で被害が認められるケースがあり、調査を行ったところ、植栽前の苗木に既にカツラマルカイガラムシが寄生しており、その苗木が山に植栽され、被害が広がっている可能性も明らかとなった。風による分散を止めるのは困難であるが、苗木による分散は植栽前の苗木の点検、消毒で対処することができる。

森林で発生したカツラマルカイガラムシはその被害が最大となる前後に猩紅病が発生し、その森林のカイガラムシは死滅に向かう。ただ、本病の発生は本害虫の被害がピークになる前後となるため、被害の抑止は十分ではなかった。一方、寄生蜂であるツヤコバチの1種が2006年頃から山梨県で認められ始めた。その後、カツラマルカイガラムシの拡大が収まり、全県的に終息へ向かった。猩紅病と寄生蜂による効果と考えている。2008年には被害はほぼ終息し、その後は、散発的に僅かな被害が確認される程度となった。東北地方ではまだ被害が拡大している県が見られる。

Outbreak of *Comstockaspis macroporana* in forest

Masashi Ohsawa

Yamanashi Forest Research Institute